

福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会

平成26年度 「ふるさと創造学」の取組みの総括(案)

ワーキング1担当

双葉町教育長 半谷 淳

◎ 全体として

本年度から双葉郡内各小中学校で取り組んだ「ふるさと創造学」であるが、ビジョン推進協議会始め、各学校の教職員の創意と熱意のある取組みにより、「双葉郡の復興や持続可能な地域づくりに貢献し、全国や世界で貢献できる人材を育成する」そして、「子供たちの実践的な学びで地域を活性化し、復興につなげる」というねらいが、いくらかなりとも達成された。

初めての試み、しかも全町村、全小中学校での取組みが、当初の計画通りすべて実施できたことは、評価される。また、急遽、先生方の自発的な要望に応じて12月に教職員研修(勉強会)も実施されたことは特筆される出来事で、今後の「ふるさと創造学」の一つの方向付けとして意義深い取組みとなった。更には、教職員研修の在り方についても、新たな視点、可能性が確認された。

一連の取組みがマスコミにも常時取り上げられ、また子供たちが参加するイベントにおける地域や保護者の参加もかなりの数になり、「ふるさと創造学」への関心が高まり、双葉郡全体の活性化を促した。一方で、初めての試みばかりであったため、反省点も多く出されており、以下、一つ一つの取組みを検証していくこととする。

1 計画の連絡、周知

○ 平成25年7月にまとめられた「福島県双葉郡教育復興ビジョン」の内容に基づき実施した「第1回教職員による子供未来会議」(平成26年1月、郡山市)にて、参加した各校の校長に上記の2つのねらいを持ち、4月から郡内各小中学校で「ふるさと創造学」を実施する旨の提案をし、了承された。その後、各教育長を通じて実施にあたり、各校で時間割に「ふるさと創造学」の表記を位置づけることを依頼し、また「平成26年度双葉郡内の学校の『ふるさと創造学』で育てる資質・能力」に関する資料を配布し、4月よりスムーズにスタートできるよう図ったが、連絡体制の不備、教育課程が既に整っている時期での新しい取組みへの戸惑い等でスムーズなスタートとはならなかった。

2 「総合的な学習の時間」担当者会議 (平成26年5月27日、「ビッグパレットふくしま」)

- 上記のような連絡体制の不備、学校現場の戸惑い等があり、加えて担当者会議より校長会での説明、理解を優先させるべきとの声もあったが、どうにか開催にこぎつけた。
- 会議自体は各校の担当者が全員参加し、県教委、教育事務所、県立高校からの参加者もあり、グループ協議での情報交換、質疑等を経て「なんとか『ふるさと創造学』を進められそうだ」という手ごたえが得られた会議ではあった。会議に先立ち、先進地区事例として島根県海士町での取組みを紹介し、参加者の動機付けとして役立った。終了後の感想では、「ふるさと創造学」への前向きな意見が多く出された一方で、新年度からの急な取組みへの戸惑い、情報が届いていない事への不満等も出された。

3 双葉郡小中学校校長会での説明 (平成26年7月10日、広野小学校)

- 5月の担当者会議の前に開催すべきであったとの意見もあったが、やむを得ず7月開催に至った。広野小での郡小中学校校長会協議会にて、半谷と事務局庄野二人で、経過や趣旨、今後の計画等について説明をした。概ね理解は得られたようであったが、一部の校長からは、新しい取組みを教育長会からトップダウンでおろされることへの疑問が出され、ボトムアップで現場の要望に基づき取組みを考えるべきである、そして現場で苦労している教職員へ新しい取組みへの労力等、配慮をすべきである、との意見も出された。ここでも現場での戸惑いが示されたように感じ、また、今後の取組みの参考とすべき意見だと受け止めた。

4 ふたばワールド 2014 in かわうちでの「ふるさと創造学」中間発表

(平成26年9月28日)

- 「ふるさと創造学」の中間発表と位置付けた取組みで、学習の成果の掲示、作品の展示等が中心の取組みであったが、伝統芸能の発表、メインステージでのPR、「ふたばの教育復興応援団」メンバーの国会議員、小泉進次郎氏と詩人の和合亮一氏による模擬授業、更にはカフェコーナーや写真展示コーナー等の盛りだくさんの内容で実施され、「カエルと森の学校～ふたばミュージアム～」のテーマにふさわしい、川内の豊かな自然の中に、これまで見たこともない、わくわく感溢れる森の学校がその日誕生した。
- 前日の準備では、双葉郡教育復興ビジョン推進協議会のメンバーは勿論、IT関連企業からも多数の応援を頂き、カフェコーナー始め、模擬授業等で大変お世話になり、改めて双葉郡への支援の輪の広がりが実感できた。今後の取組みの支えになる、という期待感も得られた。また、前夜祭での高揚感は、このイベントに対する担当者全員の意気込みの表れでもあった。
- 事前の宣伝効果もあり、川内小学校内での展示コーナー始め、すべてのコーナーに来訪客が大挙押し寄せ、大盛況であった。とりわけ午後の模擬授業では、体育館に入れ切れない人が多数出るなど、予想を超える反響が見られた。また、各学校の先生方、保護者、子供たちの来訪が多数見られたことも成果としてあげられる。一方で、入場制限をしたことや子供たちの協議の形式等での反省点が出された。
- その他の反省点として、展示や模擬授業までの準備、参加児童・生徒数の把握、当日のOA機器の準備の手違い等での混乱が見られ、大きなイベントとの兼ね合いの中で中間発表を実施することの困難さもあった。また、会津やいわき、二本松等遠方からの参加のための配慮等、今後一考を要する内容である。

5 「総合的な学習の時間」に関する教職員研修 (平成26年12月1日、郡山市)

- この取組みは、教職員の自発的な要望により実現したもので、今年度の取組みの大きな成果の一つとして考える。5月の担当者会議、7月の校長会での説明、9月の川内での中間発表を経て、各学校で先生方が「ふるさと創造学」をどのように進めるべきか考え、悩み、取組み、「総合的な学習の時間」の指導の原点に立ち返り、研修意欲を示したことは、
特筆される。中間発表での文部科学省、田村教科調査官の示唆に富むコメントも研修に向かう動機づけになった。
- 研修での先生方の関心は、「いかにして探究的な学びにつながる活動を考えていくべき

か」であった。田村先生の講話、ワークショップでの協議及び協議に関する田村先生のコメントには、参加者全員が少しでもヒントを得ようと集中していた様子が窺えた。

6 第1回ふるさと創造学サミット（平成26年12月20日、「ビッグパレットふくしま」）

- 一日行事で、各町村からの子供たちの学習の成果の発表、そして乙武洋匡氏による「夢ゼミ」と、盛りだくさんの内容で、サミットの案内の仕方や各町村の参加及び準備、保護者の参加等、相当な不安を抱えてのサミットであったが、不安を吹き飛ばす程の充実した、しかも内容のあるサミットになった。参加者も約400人に上った。
- 「中間発表より内容が格段に進んでいる」と田村教科調査官がコメントしたように、各町村の子供たちの、それぞれの地域に関する学習、地域の人々との関わり、地域の復興への参加、伝統芸能の継承等、実に内容の濃い発表がなされた。発表態度も実に堂々としていた。子供たちの発表を支える先生方のIT技術も高く評価された。
- 参加者の感想を見ると、大多数は成功を喜ぶ意見がある一方、次年度以降の発表の形式、参加の仕方、更にはサミットを開くことの意義を問う声も聞かれた。検討すべき課題であろう。「夢ゼミ」もかなり好評を博したが、一部、講師の話の内容に疑問を呈する声も聞かれた。復興に対する様々な意見の表れである。

7 ふるさと創造学研修旅行in海士町（平成26年12月25日～27日、島根県海士町）

- 「第1回ふるさと創造学研修旅行in海士町」がようやく実現した。郡内の子供たちをいかに参加させるか、郡内の高校生の参加をどのように募るか等の苦労を経て実現した研修旅行であった。
- 出発までに高校生1名、当日に中学生1名がそれぞれ家庭の事情、インフルエンザ等の理由で不参加となり、最終的な参加者は中学生6名、高校生2名の計8名での研修となった。研修時期としては、より暖かい時期を考えるべきであった。
- 研修自体は実に有意義で、地域復興へ取り組む海士町の高校生、自らの生き方や学び方を深く追究させようと島をあげてサポートしている海士町の素晴らしい取り組みを目の当たりにし、参加者全員が引率者も含めて、これ以上ないほどの充実感が得られた旅行であった。ふたばからの参加者の意欲的な参加態度、優れた表現力は、やはり「ふるさと創造学」の取り組みの成果であった。子供たちの今後の成長が楽しみであり、更に多くの子供たち、教職員が海士町研修に参加できるようにしたい。

8 第2回教職員による「子供未来会議」（平成27年1月23日、「ビッグパレットふくしま」）

- 昨年1月に開催された第1回の会議の盛り上がり、参加者の要望を生かす形で設けたものだが、今回はこの4月に開校する中高一貫校「ふたば未来学園」をどのように魅力的な学校にしていくか、というテーマで議論が盛り上がった経過があるが、今回はそのような盛り上がり期待できるか予想できなかったが、開催に踏み切った。
- 今回は、熊本県水俣市で「地元学」を主宰している、吉本哲郎氏の講話を位置づけた。吉本氏は長年水俣の環境改善、風評被害対策に取り組みながら、地元の魅力を見出し、創り出す取り組みを組織的に実践し世界に発信することで地域の活性化に結び付けている。参加者全員がその取り組みの着眼点、内容の素晴らしさに感嘆させられ、息

の長い、困難な作業の中から見出した「地元学」の思想、哲学に、深く共感した。

- 郡内の教職員、教育長、県教委のメンバーが「ふるさと創造学」という共通のテーマで、ワールドカフェの形式で自由闊達な議論ができ、「ふるさと創造学」で何をしたら良いか具体的なものを見い出さなければいけないという指摘をWG1委員の日渡先生より受けたことは、実に有意義であった。

9 成果と課題

- 今年度の成果としては、以下の点が考えられよう。
 - (1) 初めての郡内共通の取組み（「ふるさと創造学」）がスタートできた
 - (2) 子供たちの意欲的、創造的な学びの姿が見られ、地域に発信できた
 - (3) 教職員の研修意欲の高揚が見られた
 - (4) 「ふたば未来学園」創設にビジョンの趣旨が活かされ、中高連携の議論が進んだ
 - (5) 双葉郡各町村での活性化に寄与する動きを創り出すことができた
 - (6) 「ふるさと創造学」を通じて、「ふるさと」のとらえ方、教え方の議論が進んだ
- 今後の課題として、以下の点をあげたい。
 - (1) 「ふるさと創造学」の構想の検討・議論を進めるとともに、今年度の取組みを発展させていく（「ふるさと創造学」の定義や体系的・系統的な全体像の議論・構想を深め、教職員の指導力向上のための町村をまたいだ勉強会や公開授業など、教職員の自発的・主体的な取組みを促進・サポートするための仕組み作りなど）
 - (2) 子供たちの探究的な学びの構築、地域の復興に繋がる取組みを模索する
 - (3) 「ふたば未来学園」との連携による双葉郡ならではの魅力ある教育を展望する
 - (4) 中高一貫・併設中学校創設、学校支援地域本部の組織化、コミュニティー復興拠点施設設置等、ビジョンの具体化に向けての取組みを推進する

10 その他（議論すべき疑問点）

- 「ふるさと創造学」の取組みでも、子供の数は増えないのではないかと
- 今の、先が見えない状況では、何をやっても状況は変わらない



- ◎ どんな状況に置かれても、教師は常に最高の教育を目指し、教え続けなくてはいけない！
- ◎ 一つの取組みで意識の変革が期待できる、意識が変われば状況が変わる！
- ◎ 大人が変われば子供が変わる、子供が変われば未来が変わる！（海士町、岩本）

今年度の成果は、上述のように、何点か挙げられるように思うが、これらの成果を踏まえて、一つ一つの取組みの実効性、必要性を再確認し、得られた反省を次年度の取組みに活かしていかなくてはならない。また、取組みの成否は、子供たちにとって重要且つ必要なものを2年、3年と継続する中で判断されるべきものであることを、肝に銘ずるべ

きであろう。その意味で、次年度は今年度の成果と課題を踏まえた上で、新たな構想の下で、平成27年度版「ふるさと創造学」を構築していきたいと考える。

この間、『ふるさと創造学』の取組みで一体何が変わるのか、子供は増えないのはいか」という切実且つ、根元的な問いかけが度々聞かれてきた。ヒントは「ふたば未来学園」開校までの取組みに見られるのではないか。当初、「原発事故の影響で、双葉郡には生徒が集まるはずがない」という声が多く聞かれたが、これまで県教委は勿論ビジョン推進協議会の様々な取組みやPRにより、定員を超えた生徒が入学するという状況が生まれた。一つの意味のある取組みが状況の変化をもたらす好例ではないかと思う。従って、今後も自分達の取組みに自信を持ち、常に課題意識を欠かさず、組織の力を信じ、力強く前進していくことが重要であろう。